

タマとポチの腹時計

ひたひたと静かに、迷宮を進む。

タマの役目は相手より先に魔物を見つける事。
新しいご主人様がくれた役割。

耳を澄ます。

かさかさかさ——これは平気、小さな虫だから。
ぴたぴたぴた——これは井守、美味しいヤツ。
カチカチカチ——これは。

「にゅ！」

耳と尻尾を立てて、正確な音の方向を探る。

「どうしたタマ？」

「敵見つけた？」

ビシツと音の方向を指さすと、ご主人様が頭を撫でて「偉いぞ」と誉めてくれた。
嬉しい。

「ちよつと、面倒な敵だから静かにやり過ぎそう。こっちの道に戻るよ」

「あいゝ」

ご主人様は道に詳しい。

通り慣れた道みたいなのに、迷宮を知ってる。

不思議だね、つてリザに聞いたたら、「余計な事を言っではいけません」つて叱られた。
ご、ふ、き、よ、ー、を、刈、つ、た、ら、捨、て、ら、れ、ち、や、う、ん、だ、つ、て。

草刈りとは違う？

タマは新しいご主人様が好きだから、捨てられたくない。

だから、余計な事は言わないの。

——ぐるぐるきゆるるん。

大きな音が迷宮に響く。

お腹が空いたときの音。

ポチのお腹がきゆるきゆる鳴っている。

タマはまだ大丈夫、蜜菓子も干し肉も食べたから。

「ご、ごめんなさい、なのです」

「ポチ、お腹に力を入れて止めなさい。早く」

「と、止まらないのです」

「頑張れ〜」

慌てるポチをリザがもつと慌ててお腹が鳴らないように押さえてる。
タマも応援。

「にゅ？」

カチカチ音の鳴り方が変わった。こっちに来るみたい。

「ご主人様、魔物来る〜？」

「そうみたいだね」

伝えたら、ご主人様がちよつと怖い顔で魔物の来る方を睨んだ。

怒ってる？

「ご主人様、申し訳ございません。お怒りはごもつともです。いかような折檻でもこの身でお受け致します。ですから、ポチを放逐するのだけはご容赦ください」

リザが難しい言葉でご主人様に謝ってる。

ポチもリザも泣きそう。

タマも横に並んで「ごめんなさい」する。

「謝るのは後。リザ、二人を連れて通路の影に避難してて。こっちに来る敵は毒液を吐くヤツなん

だ」

「ご主人様はなんだか困った顔してる。怒ってないのかな？」

「ぐえ」

そんな事を考えていたら、リザに服を引っ張られちゃった。リザはなんだかいつもと違う。ちよつとピリピリな感じ。



「ご主人様は強い。とつてもとつても強い。」

シュッと行って、ポンツと蹴ると魔物の首が取れて飛んでいく。

「倒し終わったよ」

「ご主人様が戻ってくる。」

「ご主人様、先ほどは私どもの不手際で魔物を引き寄せてしまい慚愧の念に堪えません」
難しい言葉でリザがポチの代わりに謝る。

「ごめんなさい〜」

タマもリザと一緒に謝る。

だって、タマはお姉ちゃん、だから。

「ごめんなさい、なのです」

涙目のポチも一緒。

ご主人様の手がポチの方に伸びる。

ポチがビクッと震えた。

タマも。

でも、ご主人様はポチをぶたなかった。

「泣くほど謝らなくていいよ」

優しくポチの頭を撫でる。

どうして？

よくわからないけど、ポチが叩かれなくて良かった。

「これからはお腹が鳴りそうなくらいお腹が減ったら、早めに言うんだよ」

ご主人様はポチの涙を拭きながら、ポチの口元に赤茶色のを押しつけた。

——肉！ あれは干し肉！

「少ないけど、食べておきなさい。もう数部屋向こうまで進んだから休憩するから、ちゃんとした

食事はそっちでしょう」

干し肉を受け取ったポチが、困ったような嬉しいような複雑な顔で戸惑う。

「宜しいのですか？」

「ああ、構わないよ。リザとタマも少し食べておくかい？」

リザが確認したら、ご主人様が鞆から干し肉を取り出してリザとタマにもくれた。

干し肉！

いい匂いにクラクラする。

とっっても、とっっても嬉しい。

食べていいのかな？

干し肉、食べたい。

食べちゃダメ？

リザに目で尋ねたら、待ちなさい、って返ってきた。

もうちよつと我慢しよう。

ポチの口からダラダラと涎。

きつとタマも一緒。

「出口までどのくらいかかるか分かりません。食料は取っておいた方が良いでしょう……」
「大丈夫だよ。それほどたくさん食べ物があるわけじゃないけど、このペースなら出口までは余裕で持つから」

心配そうなりずにご主人様が笑顔で返す。

にゅ〜？

ご主人様は出口までの道順や距離が分かるのかな？

不思議だね、つてリザに目で尋ねたら、「余計な事を言っではいけません」って叱られた時と同じようなピリピリした顔を向けられた。

きつと、口に出したら、ごふきよーを刈って捨てられちゃうんだ。

タマは静かにする。

そろそろ、干し肉食べちゃダメ？

「持っていないで食べなさい。これは命令だよ」

ご主人様が言う。

やったー、命令だから食べないと。

食べていいんだよね、とりざに目で聞いたら頷いてくれた。

パクツと口に入れると肉の香りと塩味が口に広がる。

もぐもぐすると口の中に肉の良い味がしみ出してきた。

しゃーわせく？



ご主人様は強い。

とつてもとつても強い。

シュツと行つて、ポンツと蹴ると魔物の首が取れて飛んでいく。向こうで戦つてても、タマ達が危なかつたらいつの間にか戻つてきて助けてくれる。

だから、タマは安心して目の前の魔物と戦える。

リザの槍で隙ができた魔物の足下を、ポチと一緒に攻撃する。

ぐぎやーと鳴く魔物の口の中にリザの槍が刺さつて終了。

どさりと倒れる魔物の大きな身体に潰されないように、後ろに飛んで避けた。

「そっちも倒せたみたいだね」

ご主人様が笑顔だ。

よかつた、タマ役に立ってる。

——ぐるぐるきゆるるん。

大きな音が迷宮に響く。

お腹が空いたときの音。

タマのお腹がきゆるきゆる鳴っている。

ご主人様やリザ達がこっちを向いた。

叱られる？

「ごめんなさい」

タマはご主人様に謝る。

先に言えって言われていたけど、鳴るまで分かんなかった。

「敵を倒した後だから別に謝らなくていいよ」

良かった。

怒られなかった。

リザとポチもホッとしてる。

「タマの腹時計は正確だね」

「腹時計〜？」

何だろう？

「腹時計っていうのはね、ご飯の時間になったら鳴るお腹の音の事だよ」

ご主人様が教えてくれた。

「時計って何なのですか？」

ポチが尋ねた。

タマも知らない。

「時間が分かる機械だよ」

ご主人様がそう言って、胸元からガラケーっていうのを見せてくれた。
小さな模様が一杯。

「数字は読めないか——これでどうかな？」

ご主人様が何かすると、小さな文字で一杯だったのが、丸いのに囲まれた三本の線に変わった。

「この早く動くのが秒針、これが一周して動くのが分針、この分針が一蹴したらこつちの短い針——短針が動く、この短針が二周したら一日だ」

難しい。

ポチがふんふんと頷いている。

でも、タマは知ってる。ポチもよく分かっていないはず。

「すごいのです」

「あいゝ」

ポチがガラケーを誉める。

タマもよく分からないけど、すごいと思うから頷いた。

「時間は何に使うのです？」

ポチがご主人様に尋ねた。

そういえば、何に使うんだろう？

「えーっと、そうだね……ご飯までの時間を知ったり、日の出や日の入りまでの時間を知ったりとかかな？」

「腹時計（はらどけ）〜？」

「ガラケーのヒトもキュルキュルと鳴るのです？」

ご主人様が「ちよつと違う音だよ」と言つて、聞かせてくれた。
ピコピコだったりテロテロだったり、面白い音。

「楽し〜？」

「色々な音があるのです！」

「音の出る魔法道具は初めて見ました」

ポチやリザも感心してる。

「声も登録できるんだよ」

声？

「合図したら、名前を言ってごらん？」

「ご主人様の合図でポチが「ポチなのです」と言う。

「再生するよ——『ポチなのです』」

「ポチそっくり？」

「ポチの声を複製するなんて……すごい魔法道具ですね」

「ご主人様のガラケーからポチの声がした。

リザもびつくりしてる。

でも——。

「ポチの声はこんなじゃないのですよ？」

ポチが首をコテリと倒して違うつて言う。

——そっくりだよ？

「そういうモノなんだよ。今度はタマが吹き込んでごらん」

「あいゝ？ タマはタマゝ？」

ご主人様のガラケーから「タマはタマゝ？」つて変な声が出た。

なのに——。

「タマの声なのです！」

「ええ、そっくりですね」

ポチとリザがそんな事を言う。

「タマの声と違うつて？」

タマがそう言ったら、ポチとリザが変な顔をした。

「それはね——」

ご主人様が自分の声が違う声に聞こえる理由を教えてくださいましたが、難しくてよく分からなかった。

「今度は色々な声を入れてみようか」

ガラケーで声を真似っこして貰うのは面白いから、ポチと一緒に頷いた。

「朝なのです。起きないと朝ご飯抜きなのですよ」

ポチが怖い言葉を吹き込んだ。

ご飯抜きは重罪。タマは早起きする。

「今度はタマが吹き込んでごらん」

「あい！」

何にしよう？

そうだ！

「もうすぐ、夕方？　晩ご飯の時間？」

これなら幸せ！

「それじゃ、リザはお昼時の声を吹き込んで貰おうかな？」

「お昼ですか？」

お昼はご飯食べないよね？

だって、お昼は仕事の時間なもの。

「昼ご飯の時間とか——」

——ぐるぐるぐる。

ご主人様の言葉の途中でお腹が鳴った。

——きゆるきゆるるん。

——くるくるきゆるるん。

ポチとリザのお腹もだ。

「——おっと、ごめんごめん。みんながお腹を空かせているのをわすれていたよ」

ご主人様が大きな干し肉の塊を一人一人に渡してくれた。

「大っきい〜？」

「すごく美味しそうですね」

「こんなに宜しいのですか？」

「たくさん戦ったんだから、たくさん食べなさい。ご飯の後に少し仮眠を取ったら、また迷宮を進むから、ゆっくり良く噛んで食べるんだよ」

ご主人様がにっこりと笑う。

ポチがガブリと干し肉の塊に齧り付いた。

尻尾がぶんぶん揺れている。

タマも負けずに齧り付く。

リザも一緒。

「干し肉うま〜？」

「肉は最強なのです」

「美味です」

干し肉の香りに包まれて、タマは幸せに浸る。

迷宮からは早く出たいけど、こんな時間はもっと続いて欲しい。

タマはポチとリザとご主人様と、もつともつと一緒にいたい。

たぶん、それがタマの幸せ、だから。